

令和4年3月4日

福岡市政記者各位

経済観光文化局文化振興課

令和3年度福岡市文学賞受賞者が決定しました

令和3年度福岡市文学賞の受賞者が決定しましたので、お知らせいたします。

福岡市文学賞

福岡市において文学活動が続ける作家の中から、近年において特に優れた功績をあげた個人を表彰することにより、受賞者のさらなる文学活動の充実・発展につなげるとともに、市民が優れた文学作品にふれる機会を作り、福岡市の文学の普及と振興を図ります。

【制度創設】昭和45年度（今年で第52回目）

【受賞者累計】290名（令和2年度まで）

【受賞基準】本市または福岡都市圏に居住し、優れた著書の出版、もしくは、優れた作品を継続的に発表するなど、近年顕著な文学創作活動を行ったと認められる個人（過去において文学賞を受賞した者を除く。）

令和3年度受賞者

【小説】 よねもと こうじ
米本 浩二

【短歌】 たけなか ゆうこ
竹中 優子

【詩】 あらひら たいわ
荒平 太和

【俳句】 おおやぶ きみこ
大藪貴美子

【詩】 いたう ふゆる
伊藤 冬留

【川柳】 はぎわら なつこ
萩原奈津子

■ 贈呈式（関係者のみ出席）

日時 令和4年3月26日（土）13時～

場所 福岡アジア美術館あじびホール（福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル8階）

※新型コロナウイルス感染拡大状況により中止する場合があります。

■ 記念作品集の刊行

受賞者の作品を収録した「記念作品集」を、4月上旬以降に福岡市総合図書館と各分館で貸し出します。（情報プラザ等でも閲覧可）

■ 添付資料

別紙1）令和3年度（第52回）福岡市文学賞の受賞者について

別紙2）令和3年度（第52回）福岡市文学賞選考経過

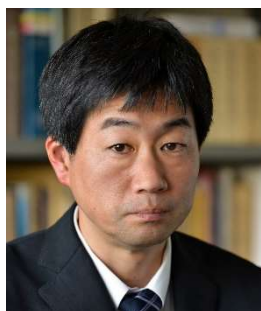
別紙3）受賞者調書

【問い合わせ先】

経済観光文化局文化振興課 中牟田

（電話：092-711-4664 内線1801）

令和3年度（第52回）福岡市文学賞の受賞者について（敬称略）



○ 米本 浩二（よねもと こうじ） 【小説（評論）】

毎日新聞記者を経て現在、津田塾大学非常勤講師（環境社会学）

石牟礼道子資料保存会研究員

【著書】

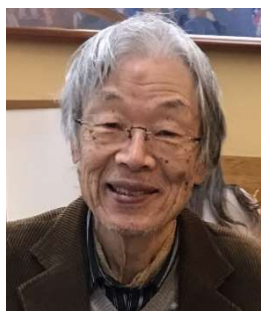
『みぞれふる空—脊髄小脳変性症と家族の2000日』（2013年）、『評伝石牟礼道子—渚に立つひと』（2017年）、『不知火のほとり—石牟礼道子終焉記』（2019年）、『魂の邂逅—石牟礼道子と渡辺京二』（2020年）



○ 荒平 太和（あらひら たいわ） 【詩】

【著書】

詩集『回転する望み』（1971年）、『三つの詩集とたまげた将来』（1973年）、『橙山』（1976年）、『物質の歌』（2001年）、『我身一人日記』（2005年）、『枯葉のラブソディ』（2019年）
評伝『わが文学の師 杉山参録』（2012年）



○ 伊藤 冬留（いとう ふゆる） 【詩】

詩誌「侃侃」所属

【著書】

『巡礼歌』（1990年）、『辻音楽師』（1999年）、『冬の旅人』（2007年）、『冬の楽章』（2012年）、『冬の挽歌』（2016年）



○ 竹中 優子（たけなか ゆうこ） 【短歌】

作歌歴7年、未来短歌会 黒瀬珂瀾選歌欄所属

第62回角川短歌賞受賞（2016年）

【著書】

歌集『輪をつくる』（2021年）



○ 大藪 貴美子（おおやぶ きみこ） 【俳句】

福岡市の飯原公民館句会（1985年）、その後、百年句会、さわら野句会へも参加するほか、鎌倉の俳誌「玉藻」（1986年）、俳誌「冬野」（1989年）にそれぞれ入会。その他福岡市内のカルチャーセンターへ入会后、中心的役割を担い、「玉藻」同人となる（2006年）。

【著書】

句集『花だより』（2021年）



○ 萩原 奈津子（はぎわら なつこ） 【川柳】

川柳楠の会誌友となり（2010年）、川柳楠の会会長（2016年）となる。

福岡市シニア教室講師（2019年）のほか、福岡市川柳作家協会副会長、福岡県川柳協会会長を務める（2020年）。全日本川柳協会常任幹事に就任（2021年）。

【著書】

川柳句集『ひと文字綴り』（2021年）

令和3年度（第52回）福岡市文学賞選考経過

【小説部門】

地元の同人文芸誌掲載作品から受賞者を出したいものですね…今回の選考でも三委員はそう語り合った。地域で地道な文学活動をしている人々こそ、この文学賞に真っ先に似つかわしいと思うからだ。この一年、「南風」「季刊午前」「海」「照葉樹」「九州文学」「ガランス」「筑紫山脈」などの各誌が短編を主とした小説を掲載した。過去の福岡市文学賞受賞作家らが執筆・編集作業で多くの同人誌活動の骨格を支えている。

その中で「照葉樹」に四回連載中の藤代成実氏「一族の終わり」が目を引きいた。源氏の落人伝説が語られる山村集落で、集中豪雨による避難を機に廃村の動揺を深めていく。今後の展開が楽しみな作品の一つだ。

単行本では、テレビ西日本の元ディレクター馬場明子氏「傷ついたマリア 片岡津代さんの祈り」が候補に挙げられた。被爆した懊悩とその克服の道程を、本人や知人らへの取材を踏まえて追った評伝だ。

三人が一致して推したのが、2018年2月に九十歳で亡くなった石牟礼道子氏に関する米本浩二氏の評伝三部作だ。亡くなる前年の「評伝 石牟礼道子一渚に立つひと」、病床に寄り添って最晩年を見守った「不知火のほとりで一石牟礼道子終焉記」、石牟礼氏の没後、彼女の活動を長年支え続けた思想史家、歴史家、評論家渡辺京二氏との精神的な交感を綴った「魂の邂逅一石牟礼道子と渡辺京二」。米本氏は石牟礼氏の膨大な著作と資料の山に時にはたじろぎながらも、生前の取材で自分の胸に直接響いた石牟礼氏の言葉や表情の細部の記憶を大切にしつつ、彼女の物語であると同時に米本氏自身の物語でもあるような評伝をこの数年で集中的に紡ぎ出した。

石牟礼氏は「苦海浄土 わが水俣病」をはじめとする作品群について水俣病事件とのかかわりの中で語られることが無論多い。だが、彼女の魂はこの事件の深淵すらも突き抜けた底知れない異次元の時空にたゆたっている。そのことに米本氏は早くから気付いていた。石牟礼氏の作品群は、彼女の生きた軌跡を含めてさらに多彩な分光器によって新しく解き明かされ、再評価されていく稀有な文学遺産である。米本氏が今後も深めていくだろう独自の石牟礼道子論に注目している。

【詩部門】

今回の選考該当期間中（令和2年11月1日から3年10月30日）に発行され、既受賞者を除き選考委員が確認した詩集は以下の通りである。石松佳『針葉樹林』（思潮社2020年11月30日）、かるべまさひろ『透明でうそつきで心でした』（私家版2021年10月31日）、伊藤冬留詩集『羊の門』（書肆侃々房2021年6月10日）、荒平太和『歩く魂』（草木社2021年3月28日）、藍音ななを『おいしいは愛しい』（私家版2020年11月10日）、福富健二『一本の草は思った』（土曜美術社出版販売2020年12月10日）、森山光章詩集『常住此説法』（不虛舎2020年10月25日）。

このうち森山詩集は本人から辞退の申し出があり、石松詩集については直前に福岡市文化賞受賞決定の知らせがあったため、福岡市主催の重複受賞は避けたいとの選考委員の意見が一致したため上記二詩集は対象外とした。

選考はまず各委員が推薦する三冊ずつの投票を行った。その結果全委員が一致して伊藤、荒平、かるべの三詩集を挙げたため、各詩集に対してそれぞれの推薦理由を述べて討議した。

伊藤詩集については、剛直な詩集である。日常と映画やキリスト教信仰から示唆を受けた作品が入り混じる清新な面白さがある。多彩な世界が混然としながらも、詩集全体の構成によってまとまっており、表現としてもよくこなれている。といった意見が出た。

荒平詩集については、親しんだ土地と言葉の結びつきが特徴的で日々の出来事に思索が重なり「自分のもの」として再構築している。一年間の日付が付いた日記体というかたちも面白い。非常に個性的であり難解な部分もあるが、それに対して十分に自覚的である。などの評があった。

かるべ詩集については、躍動感があり多分に演劇的な要素が強い。演劇性で表現の幅を広げようとするが、物語を語るほどに生まれる間げき或いは飛躍のようなものをどうとるか。また前詩集と比べ成熟しているが表現に既視感がある。などの意見があった。

受賞詩集は二冊を限度として再度投票を行った結果、伊藤詩集三票、荒平詩集三票、かるべ詩集零票となり、今年度は伊藤、荒平の同時受賞が決定した。

【短歌部門】

本年度の選考対象となった歌集は、刊行順に巻栞『神籬の森』（樞歌書房）、竹中優子『輪をつくる』（角川文化振興財団）であった。この二冊について、桜川冴子氏、藤野早苗氏、山下の三名で慎重に協議したところ、竹中優子『輪をつくる』に決定した。

巻栞氏は宗像市在住、一五年あまりコスモス短歌会に所属し（二〇二一年三月退会）、本歌集は三つめの歌集である。七〇九首を収める。

- ・黒南風のなごりのあした船二隻みなどに入り来海鳥つれて
- ・うしろからわが手におのが手を添へて長兄は払ひを教へてくれつ
- ・六十年来の友と酔ひたりくんなしで呼べる奴がまだあて嬉しくて

おもしろいうた、心をうつ場面が折々あって引き込まれる。自然なうたい口が定着しているなかに豊かな韻律のヴァリエーションがあり、また詠む対象も身近なところが多いながら射程は広い。一方で、その分と言うべきか、一冊としてはいささか緊張感を欠くとも言える。ある水準に達していながら、受賞には一歩二歩及ばなかった。

竹中優子氏は福岡市西区在住、未来短歌会（黒瀬珂瀾欄）所属。二〇一六年、「輪をつくる」五〇首で第六二回角川短歌賞を受賞。本歌集は、同作を含む三九〇首からなる第一歌集である。

- ・才能がないと言いつつひとがいてこんな感じかなって顔で聞く
- ・素顔で生きてきたからシミも勲章と笑う女の顔が醜い
- ・口座から十七万円引き落とされた午後に両手を水のように垂らして
- ・心情を言葉で交わすやりとりを早送りしてキスシーンは見る

人の嫌なところをよく見て、それをあくまで淡々と描いて迫力がある。文体はやわらかいが、切れ味鋭い。氏は短歌のほか小説、エッセイ、現代詩など幅広いジャンルで活動しており、そのこととかかわりあいながら短歌もあるようだ。集中の家族や職場をうたって印象的な場面や比喩の世界には、今、この時代を生きることの皮膚感覚が多分に反映されており、ひりひりとした痛みを伴う。着眼・歌体ともに今までにない新しい短歌の世界で、全員一致で受賞作に決定した。

【俳句部門】

選考委員・野中亮介、松岡耕作、阿比留初見が、寄せられた推薦句集について討議をし、後日選考理由をまとめるということで、一回目の選考委員会は終了した。

まず句集を読んで、その一に、詩情があるか、その二に、リズム感があるか、その三に、言外に在る物を思わせる何かがあるか、などなどであった。その、選考経過・ご意見をいただき、結果を集約して、「花だより」を選出するというので一致し、受賞と決定した。

「花だより」は、作者・大藪貴美子の俳句歴三十余年の重みを感じさせる内容で、やさしさ、柔らかさの詩風を感じさせるということであった。

この句集は、三百七十一句が収められているが、内容的には、春夏秋冬の四季別に配列されていて、作者三十余年の集大成ということができる。春は「糸桜」夏は「草笛」秋は「時雨虹」冬は「小春」など、洒落た題名が付き、読む人の心に届く工夫がされている。

作者は写生を基本とする姿勢を持っていて、「あとがき」にあるように、「集中力を高めるため、家族が寝静まるのを待って句作りをした」など、真摯に立ち向かっている様子が窺えるのである。

「わが夢のいろは透明去年今年」青春時代であろうか、性格の明るさを込めながら、精神性もきちんと詠み込まれ、「春めくや力抜きたる波頭」「黄梅の枝垂れの先に日のゆるる」「厳しさもやさしさも見せ落つる」などでも、観察眼を効かしながら、主観をも込めながら、情感をきちんと出した句が見られる。

また、「想ひ出をつまむ指先ゆすら梅」のような情感に、「溶け出して児の持て余しある氷菓」の笑みの浮かぶ俳諧味のある句もみることができる。それに「澄む水の石に躓くときひかる」などの句が並び、飽かずに読ませる句集であるということで、受賞に至った。（文中敬称略）

【川柳部門】

例年通り、これ迄の文学賞受賞者の各氏に候補の推薦を頂いた。今回はなんと全員一致して、萩原奈津子氏であった。これは今迄にない歴史的なことである。

奈津子氏は退職を迎え、六十歳を前に長生園の川柳講座に入会した。勸の良さと吸収力で、ぐんぐんと句を掘み、楠の会・葦群・宮崎の会員として、また各地の大会に参加してその実績を認められ、選者として活躍をされている。

楠の会会長・市川柳作家協会副会長・県川柳協会会長として、年2回の大会を取り仕切り、この度全日本川柳協会幹事に就任された。長生園・南フレンドの講師として、また個人的にも指導をされ裾野の開拓に力を尽くされている。その他、県図書館視覚障がい者の音訳ボランティアを続け、市博多図書館のお話の会の会員として、小学校2校を受け持たれている。また、博多男女協の役員を8年、地域の自治活動をされてきた。

この度大宰府天満宮余香殿に於いて、楠の会35周年を期しての、句集『ひと文字綴り』を上梓された。

三月の水の匂いにふと気付く
品格を残せと鯛の骨が言う
折鶴を紙に戻らせてはならぬ
いい顔だ組体操の一段目
裏切りの真ん中にいてメロス読む
ここがよか島に残した母ひとり

市文学賞の推薦に、この日を待っての一致となった。

どの分野もそうであるように、川柳界も高齢化が否めない昨今、現役時代からのキャリアを活かし、人心の掌握と指導に力を発揮され、次世代にバトンを繋ぐリーダーと期待をされている。

福岡市文学賞選考委員（部門別／敬称略）

【小説】 深野治	【詩】 龍秀美	【短歌】 桜川冴子	【俳句】 野中亮介	【川柳】 植村克志
鈴木比嗟子	吉貝甚蔵	藤野早苗	松岡耕作	富永紗智子
井手俊作	松本秀文	山下翔	阿比留初見	山口由利子

受賞者調書

部門	小説(評論)
氏名	米本 浩二 (よねもと こうじ)
生年	昭和36年生
住所	福岡市南区
略歴 ・ 著書	<p>徳島県生まれ。早稲田大学教育学部英語英文学科卒業。毎日新聞記者を経て現在、津田塾大学非常勤講師(環境社会学)。石牟礼道子資料保存会研究員。</p> <p>著書に『みぞれふる空—脊髄小脳変性症と家族の2000日』(文芸春秋)、『評伝石牟礼道子—渚に立つひと』(新潮社、読売文学賞評論・伝記賞受賞)、『不知火のほとりで—石牟礼道子終焉記』(毎日新聞出版)、『魂の邂逅—石牟礼道子と渡辺京二』(新潮社)。</p>
受賞理由	<p>小説家、詩人、歌人、俳人、環境運動家。多彩な呼称があり2018年2月に九十歳で亡くなった石牟礼道子氏の評伝を生前に執筆、病床に寄り添いながら彼女の最晩年を見守り、没後は石牟礼氏の活動を支え続けた思想史家、歴史家、評論家渡辺京二氏との魂の交感を見つめる著書を著した。『苦海浄土わが水俣病』をはじめとする石牟礼氏の膨大な著作、それらを主題とする評論などおびただしい資料を丹念に読み込みつつ、米本氏は自身の心に響く石牟礼道子像を、自らの言葉で描き出すことに全力を傾注してきた。その一連の試みは貴重である。</p>

受賞者調書

部門	詩
氏名	荒平 太和 (あらひら たいわ)
生年	昭和21年生
住所	福岡市早良区
略歴 ・ 著書	〈詩集〉 回転する望み (季節風社 1971年) 三つの詩集とたまげた将来 (坦文舎 1973年) 橙山 (遺伝舎 1976年) 物質の歌 (檸檬新社 2001年) 我身一人日記 (石風社 2005年) 枯葉のラプソディ (草木社 2019年) 〈評伝〉 わが文学の師 杉山参緑 (海鳥社 2012年)
受賞理由	一年間の日付が付いた日記体というかたちが新鮮な詩集。 親しんだ土地と言葉の結び付きが特徴的で、日々の出来事に思索が重なり、表現の方法にも十分に自覚的である。

受賞者調書

部門	詩
氏名	伊藤 冬留 (いとう ふゆる)
生年	昭和10年生
住所	筑紫野市
略歴 ・ 著書	同志社大学文学部文化学科卒業 〈著作〉 『巡礼歌』(梓書院 1990年) 『辻音楽師』(中川書店 1999年) 『冬の旅人』(鉦脈社 2007年) 『冬の楽章』(鉦脈社 2012年) 『冬の挽歌』(鉦脈社 2016年) 詩誌「侃侃」所属
受賞理由	剛直な詩集。日常と映画やキリスト教信仰から示唆を受けた作品が入り混じる清新な面白さがある。多彩な世界が混然としながらも、詩集全体の構成によってまとまっており、表現としてもよくこなれている。

受賞者調書

部門	短歌
氏名	竹中 優子 (たけなか ゆうこ)
生年	昭和57年生
住所	福岡市西区
略歴 ・ 著書	1982年 山口県生れ 作歌歴 7年 未来短歌会 黒瀬珂瀾選歌欄所属 2016年 第62回角川短歌賞受賞
受賞理由	<p>2016年第62回角川短歌賞受賞後も、文学ジャンルを超えて自由詩・短編小説の執筆に挑戦するなどマルチな才能を発揮している。</p> <p>・女子が輪をつくる昇降口の先、花は光の弾薬庫として</p> <p>歌集名の由来となった一首。他者がつくる輪の中に入れない疎外感が、不穏さを内包しつつ淡々と詠まれる。均質化しているように見えて実は不条理に満ちたアンバランスなこの世界に竹中氏は静かにメスを入れる。従来の短歌観に依拠しない作風は今後の歌壇のありようを大きく変えていくであろう。その影響力の大きさははかり知れない。</p>

受賞者調書

部門	俳句
氏名	大藪 貴美子 (おおやぶ きみこ)
生年	昭和10年生
住所	福岡市城南区
略歴 ・ 著書	<p>昭和10年 福岡市生まれ</p> <p>昭和60年 福岡市の飯原公民館句会に参加。 その後、百年句会、さわら野句会にも参加。</p> <p>昭和61年 鎌倉の俳誌「玉藻」に入会。</p> <p>平成元年 俳誌「冬野」に入会。 その他福岡市内のカルチャーセンターにも入会し、 熱心に活動し、中心的役割を担う。</p> <p>平成18年 「玉藻」同人となる。</p> <p>令和3年 これらの俳句活動の集大成として、 句集「花だより」を刊行する。</p>
受賞理由	<p>俳誌「冬野」に在籍し、多くの会に参加しながら俳句力を磨かれております。</p> <p>この「花だより」も家族、友人との交わりも明るく愛おしく詠まれていますし、「寒灯やわけなく涙ぐむことも」のような情の深さ、機微を内に込めながら詠まれ、また「溶け出して児の持て余しみる氷菓」のような、俳諧味のある詠みぶりがあったりで、質の高さも感じさせてくれます。</p> <p>なお、人としても優れた人格をお持ちで、句の内容とも選考委員の意見も一致しましたので、推薦させていただきます。</p>

受賞者調書

部門	川柳
氏名	萩原 奈津子（はぎわら なつこ）
生年	昭和23年生
住所	福岡市博多区
略歴 ・ 著書	<p>2010年 7月 川柳楠の会誌友</p> <p>2016年 1月 川柳楠の会会長</p> <p>2019年 4月 福岡市シニア教室講師</p> <p>2020年 4月 福岡市川柳作家協会副会長</p> <p>〃 福岡県川柳協会会長</p> <p>2021年 4月 全日本川柳協会常任幹事</p> <p>2021年12月 川柳句集『ひと文字綴り』上梓</p>
受賞理由	<p>選考にさきがけ、笛の会（福岡市文学賞川柳部門の受賞者）へのアンケートを行ったところ、全員一致の結果にもとづき「萩原奈津子さん」を推挙いたします。</p> <p>すでに川柳作家としての実績はもとより、各地川柳大会にも積極的に参加され、本格川柳普及へのエネルギーギッシュな行動に大いに期待しています。</p>